

平成26年度兵庫県景気動向懇話会結果について

- 1 日 時 平成27年2月24日（火）10:00～12:00
- 2 場 所 兵庫県職員会館502号室
- 3 出席者 アドバイザリースタッフ 小沢 康英（神戸女子大学文学部准教授）
尾下 優子（神戸大学大学院海事科学研究科助教）
豊原 法彦（関西学院大学経済学部教授）
松本 英敏（日本銀行神戸支店営業課長）
丸山 佐和子（神戸大学大学院経済学研究科准教授）

※五十音順

事務局 企画県民部ビジョン局長
企画県民部統計課 課長外5名
産業労働部政策労働局産業政策課 1名

4 議事

（1）景気基準日付（第15循環の景気の谷）の暫定設定について

【主旨・結論】

兵庫県では、景気動向指数をもとに各景気循環における経済活動の比較のために、主要な経済指標の中心的な転換点である景気基準日付を設定している。

兵庫県における第15循環の景気の谷について、ヒストリカルD Iの結果や、景気拡大の波及度、量的な変化、及び後退・拡張の期間の検証、さらには日銀短観や兵庫県鉱工業指数等との整合性を確認し、平成25年2月を事務局案として提示した。

これにつき、アドバイザリースタッフからは、概ね妥当であるとの意見をいただいたので、第15循環の景気の谷を平成25年2月に暫定設定する。

【主な意見】

- ・ 特に違和感はない。提示案で適切ではないかと考える。
 - ・ 提示された平成25年2月前後が谷であることは確かだと思う。ただ、大きな改善局面にある中での小さな谷である可能性はあるので、確定まで引き続き注視する必要がある。
また、鉱工業指数の在庫循環図において、第何象限にあるかという状況も参考となる。ただ、今回は事務局が提示したその他の検証結果で十分に判断できると思われる。
- 最近の在庫循環図は、以前のような理論どおりの動きを示しておらず、少々実態と乖離しているのではないかとと思われる部分もあるため、今回は資料に入れなかったが、貴重なご意見として参考にさせていただきたい。（事務局）

- ・ 概ね妥当だと考える。阪神・淡路大震災以降、全国に比べて兵庫県の景気回復は少し遅れる傾向にあるように感じられ、その点からも全国の暫定谷の時期から3ヶ月後ずれしている状況についての違和感はない。
- ・ 兵庫C Iの採用系列にはなっていないものの、貿易統計の県輸出額が平成25年3月以降、前年比を上回る状況が続いたことや、平成24年秋以降の円安などを勘案すると、提示案は自然だと思われる。
- ・ 提示案で妥当だと考える。耐久財などは、今回設定しようとしている谷のあたりから既に増税前の駆け込み需要が始まっていたとも聞いており、その点からも違和感はない。

国は投資財を一致指数の採用系列に含めているが、県でこれらに相当するもの・代用するのはどれか。合致するものがないということであれば、やはりそこが全国との谷の時期の差なのかと思う。

→ 投資財を構成する1つである建設財とある程度関連するのが着工建築物床面積ということになるが、どこまでの連動性があるかは確認していない。(事務局)

(2) C L Iの兵庫県への適用について

【主旨】

C L I (Composite Leading Indicators) とは、O E C Dが作成している景気循環を表す指数であり、O E C Dに加盟する各国について公表している。各国の先行指標を用いて作成されるため、C L Iの変動は景気循環に先行するという特徴があり、景気の短期変動での定性分析に用いられる。

現在、兵庫県で採用されている先行指標7系列から、当てはまりのよい個別系列を検証した結果、生産財生産指数、鉱工業製品在庫率指数、企業倒産件数、日経商品指数(17種)の4系列を採用したC L Iが最も妥当な結果が得られた。これは、先の議題で決定された第15循環の景気の谷に4ヶ月程度先行しており、矛盾は見られない。一般にこれらの指標は4ヶ月程度の先行性が見られること及びそのばらつきが少ないことが望ましいので、更なる向上を図ることができれば、景気指標が作成されていない地域での先行性も見通せるようになると考えている。

【主な意見】

- ・ C L Iはどのように生かすのか。政策判断への活用のされ方などはどうか。例えば、大阪府では直近の景気の山・谷を設定していないので、参考資料として意義があるように思う。
- 政策判断は各主体が行うべきものだが、指標自身は月次の個別指標の時系列データがあれば作成可能なので、国や地域において共通化した指標として活用できるのではないかと考える。